

中国研究の昨今を振り返って

新理事長 厳善平（同志社大学）

私は中国の大学を卒業した 1984 年の翌年に留学で来日した。院生時代を含め日本で現代中国の社会・経済研究に従事する年月は相当長い。ここで、日本における中国研究の問題意識や課題、方法などで大きな変化が起きているのを目の当たりにした者として、中国研究を取り巻く国内外の状況変化を踏まえ、中国研究の昨今を振り返ってみたい。

院生時代に、『人民日報』など国営メディアの中から限られた情報を蒐集し、毛沢東時代の社会経済を実証的に描き出そうとする先達の著作を読んで、日本人研究者の情報収集能力の高さ、問題を捉える視点の鋭さに感心した記憶がある。

改革開放が始まった 1980 年代以降、日本の中国研究のスタイルは現場重視、統計データの活用に大きく変わった。外国人が農村や工場を調査することが比較的容易であり、『中国統計年鑑』をはじめとする政府統計も公刊され始めた。特に世界貿易機構(WTO)加盟後の中国では、情報技術(IT)の進歩・普及も相まって、情報公開が加速し、新中国成立以来のありとあらゆる法規・政策文書、および各級の行政文書も洪水のように公開された。かつては大変な苦労をしてようやく入手できる統計データや文献資料も瞬時に検索し利用できるようになっている。

中国情報は量的拡大だけでなく、質的向上ならびにアクセスの利便さでも飛躍的な改善を見せて いる。個人的によく利用する現代中国の社会・経済にかかるものを挙げよう。第 1 に、人口、農業、工業、経済など様々な分野でセンサスが定期的に実施され、蓄積された集計データは、国家統計局はじめ各級統計局のホームページから利用可能である。第 2 に、ほとんどすべての学術雑誌、新聞、年鑑の電子化および一般公開は、日本など先進国よりも速いスピードで実現されている。

①中国知網 <http://www.cnki.net/>、

②国家哲学社会科学文献中心（無料）<http://www.ncpssd.org/index.aspx> はその代表例といえる。

第 3 に、全国範囲のサンプリング調査が各分野で行われ、質の高いマイクロデータの蓄積と公開も制度化されつつある。主なサイトは下記のとおりである。

①中国人民大学/中国国家調査データ庫 <http://cnsda.ruc.edu.cn/index.php>、

②北京師範大学 / 中国收入分配研究院 <http://ciid.bnu.edu.cn/>、

③北京大学/中国健康与養老追跡調査 <http://charls.pku.edu.cn/zh-CN>、

④西南財經大学/中国家庭金融調査 (CHFS) <https://iesr.jnu.edu.cn/#/>、

⑤暨南大学/経済与社会研究院 <https://iesr.jnu.edu.cn/#/>。

一方、外国人研究者が中国で農家や企業を調査し、特に独自のアンケート調査を行うことは 10 年程前から非常に難しくなっている。1980 年代以降しばらくの間、中国の大学等の研究者は、研究費が少なく外国訪問も事実上不可能であったこともあって、日本や欧米など先進国の研究者と共同研究を行うことを好む傾向にあった。こうした時代背景の下、様々な形や内容の「日中共同研究」も実施され、多彩な研究成果が上がっていた。しかし近年、中国側の研究者は非常に潤沢な研究費を持つようになり、海外資金の入った現地調査への厳しい規制を括りぬけて共同研究を敢行するこ

とのメリットも失われた。それに、中国人の権利意識・プライバシー意識が向上しており、人々の暮らしぶりや内面的な思いをストレートに聞き出す、いわば上目線の聞き取り調査やアンケート調査は今や先進国と同じように、徐々に実施困難となっている。

とはいっても全体としてより良い方向に進んでいるように思われる。実際、かつて農村、工場、役所などで行ったヒアリング調査からの情報はいま、関係部門のウェブサイトからほとんど取得できるし、統計分析に必要なマイクロデータも比較的容易に入手できる。もちろん、これだけでは社会経済の実態を正確に把握できない危険性もあるので、現地に出向いて視察するなどして、関係者から証言を引き出し、自らの目で公式文書や既存データに示されたことを確かめる作業も必要不可欠である。きめ細かな事例分析または定性的な実証研究に長ける日本の中国研究もよいが、欧米の中国研究、そして何より中国国内の中国研究と対話できるようにするために、計量的な方法を活用し、中国の特殊性の究明を主な狙いとする地域研究を進化させ、異次元の中国研究を心がけることも求められている。

そこに2つの大きな課題が横たわる。1つは何のために中国研究を行うのか、いま1つはどのような方法で中国を研究するか、である。前者に関しては、①中国・日本の発展または日中関係の改善に助言する、②研究者自らの中国理解を深める、③日本社会の中国理解を側面から支援する、④中国における近代経済成長およびそれに伴う社会構造の変化を東アジアの経験に照らし、そこに潜む普遍性と特殊性を理論的実証的に究明する、といったものが考えられようが、在日中国人による中国研究というスタンスをとっている私にとっては④が最も重要だと考える。

地域研究とは、主に途上国を対象とする先進国の研究者が自らの社会を基準枠としながら、相手国の特殊性を見出し、それを律するメカニズムを究明するものであり、(普通の)実証研究とは、個々の社会やそこに暮らす人々の意識、行動などについて様々な学問分野のディシプリン、メソッドを援用して分析し、理論の適合性を検証し、理論の更なる発展を図るものである、と私は理解する。グローバル化の洗礼を受けて急成長を遂げた中国は、社会経済の相当部分で日本や欧米のような普通の国となっている。少なくとも、中国国内の研究者の多くはそのような潜在意識をもって、米国スタイルの社会経済研究を試行している。識者の指摘している通り、いまの日本でも、中国とあまり関係を持たない政治・経済・外交等の専門家は、国際会議やメディアで普通に中国のことを語っている。中国プロパーのみが中国問題を語る時代はすでに終わっているといつても過言ではない。

中国研究を取り巻く国内外の状況が大きく変化した中、どのような観点と方法で中国を見つめるべきか、中国研究の意義をどこに求めるか。こうした難題を意識しつつ中国研究を続けているのは筆者だけなのだろうか。